



# セーラーヒロイン イカサバワーアッコナセ!

小説 舞麗辞 挿絵 しまちよ

立ち読み版

## セーラーエターナル

光の力を司るセーラーヒロイン。明るい性格でポニーテールがトレードマーク。



## セーラーブリーズ

風の力を司る橙コスチュームのセーラーヒロイン。ノリのいいまどぎの女の子。

## ジョーカー

ヒロインたちを戦士として覚醒させた異世界の生き物だが、今はネコの姿に。



むらかみまもる

## 村上衛

町で噂のセーラーヒロインたちに夢中、その姿を一目見たいと追いかけている。

# 登場人物紹介

Characters



## セーラーガイア

土の力を司る緑コスチュームのセーラーヒロイン。長身で引き締まった身体つき。

## セーラーアクア

水の力を司る青コスチュームのセーラーヒロイン。むっちりおっとり巨乳タイプ。

## セーラーイグニス

火の力を司る赤いコスチュームのセーラーヒロイン。しっとり黒髪のお嬢様系。

第1話…颯爽！ 正義のセーラーヒロイン登場!!

第2話…初体験！ エッチなお姉さんセーラーブリーズのゆ・う・わ・く

第3話…純情！ 男勝りなセーラーガイアにエッチの手ほどき!?

第4話…がんばれっ♥ゆるふわお姉さんセーラーアクアの応援エッチ!!

第5話…触るなキケン！ ツンデレ少女セーラーイグニスの本日もご機嫌ななめ!?

第6話…少年期の終り セーラーエターナルまさかの正体!!

第7話…前夜は今！ セーラー服で一晩中っ♥

最終回…最終決戦！ セーラーヒロインよ永遠に……!!

007

043

077

110

144

186

219

265



なにぶん処女の相手は初めてのことで、入り口に押し付けただけで辛いのかと思いびつくりして聞き返すと、

「いやっ、違うんだが…こっ、こんな間近に見つめあいながらとか…はっ、恥ずかしいじゃないかあっ!？」

そう訴えるガイアの表情は今にも泣き出しそうなほど歪んでいた。いつも戦闘では率先して敵に向かっていき、強気な表情を見せる力自慢のセーラー戦士とはとても思えない可憐さだ。

（うわっ恥ずかしかつてるガイアさん、乙女すぎるっ……♥）

衛としてはそんな彼女の恥じらう表情を見ながらエッチしたい。とはいえ、今でもかなり無理をしている彼女にこれ以上無理強いをして変に追い詰めてもかわいそうだ。

「そうだ…じゃあ、立ちバックの体勢にしますか？」

「たちばつく？」

少年が出した対案の意味がわからずオウム返しにセーラーガイア。

「このテーブルに手をつけて立ってください。そしたら僕が後ろから——ガイアさんはただ立っててくれれば大丈夫。あとは全部僕がやりますから」

「そうか…よし、わかった」

立ちバックなら目と目を合わせることもないし四つん這いよりは恥ずかしくないだろう。テーブルを指さし再度提案してみると、ガイアもこれならと感じたのか小さく頷くと、そ

の前に立ちそつと手をついた。

「あの、ごめんな衛……ワガママばかり言ってしまった……」

こちらが背後に立ちことに及ぼうとした刹那、バツが悪そうに目を伏せながらガィアが謝罪してきた。慣れない行為とはいえ泣き言を漏らしてしまったことには忸怩たるものがあるようだ。

（ガィアさんっ——♡）

彼女のしおらしい様子に、愛おしさがこみ上げキュンツと胸が鳴り股間がズキンと甘く疼いた。

「そつそれじゃ今度こそ、挿入れますからね——」

グイッ、とタイトスカートをたくしあげると見事に熟れ頃の白桃尻がプリンツと顔を出した。腰を押し付けるように身体を重ね、先端を割れ目の谷間に差し込み入り口を探す。

（こつ、今度こそつ——セーラーガィアの処女つ、いただきます——！）

くちゅつ、くちゅつ、と何度か上滑りした後。

にゅぐつ——パズルのピースがぴたりとはまり込むように、龟头が入り口を捕らえた。

「ひゃっ!!」

突然の侵犯に少女の花弁はびっくりしたようにヒクつき、その微細な振動が陰茎越しに衛の腰を疼かせる。捕まえたスカート越しの牝腰は想像していたよりずっと華奢だ。根が強気そうなセーラーガィアの見せる不安げな顔は保護欲と嗜虐心を同時に刺激し、その大

柄な体軀が嘘みたいに小さく可愛らしく見えた。

突き出された美臀も緊張に強張って筋肉が硬くなって居るのがわかる。腰を押し進めてゆくと、亀頭の先端で侵入を拒む薄いゴムのような抵抗があった。

(こっ、これって処女膜ってヤツ……!?)

セーラー少女の生娘の証を性器の先を感じ、今更ながらこれから自分が処女を捧げられるのだと強く実感させられる。それは無上の喜びであると同時に果てしないプレッシャーでもあった。

「ガイアさん、力を抜いてくださいいね。大丈夫、怖くないから」

本当はその言葉に根拠なんか全然ない。しかしここはまず彼女を落ち着かせてやるのが第一だろう。だから衛はできるだけ優しく、羽で埃を払うように、ヒップの丸みを何度もなぞるように愛撫してガイアの緊張をほぐしてゆく。

「う、うん……」

衛の言葉に素直に頷く様子はそれまでの男口調が嘘みたいに、まるで親の言いつけを守る子供のようだ。彼女の心の準備ができたのを見計らって捕らえた牝腰を引き寄せ、同時に自ら腰を繰り出す。

ズブツ……ズツ……ずにゆうううう——…!!

瞬間、剛直は一気に膣道突き抜けて天井をまで貫いた。陰囊が恥丘に激しくぶつかつてパチンと音がした。



（まづっ、勢いつけすぎた——!?)

もっと頑なだと思っていた処女膜の抵抗が想像以上に弱かったのだ。

「くあうっ……!?!」

事実ガリアは処女喪失の瞬間、悲鳴にも似た声をあげた。しかし彼女はすぐさまそれを飲み込み、痛みを堪えるように下唇を噛み締める。

「ごめんなさいガリアさん……いつ、痛かったらちゃんと教えてくださいね?」

ここで自分が焦ったら彼女を不安にしてみよう。できるだけ平静を装い背後から優しく抱きしめながら謝罪の言葉を囁くと、

「うっ、うん……でも大丈夫だ。その、確かに少し痛い……けど、想像してたのよりずっと平気だ。これでもセーラー戦士、痛いには慣れっこだしな」

フツツ、と小さな笑みを漏らす。どうやら無理をしての発言ではなさそうだ。

「少し……動いてみてもいいですか?」

対して堪え性のない少年は腰の疼きに耐えきることさえできず腰を震わせる。振動に粘膜同士が擦れ合ったり、結合部からくちくちと粘っこい音が響く。

「んっ…平気、そうだ……なんか少し、ムズムズするけどっ……」

刺激を受けた膣壺がひゅくんひゅくんと収縮してペニスを締め付けてくる。さすがスポーツで鍛えているというだけあってその締め付けはブリーズのものとは比べても強く、まるで女陰にしがみつかれているかのようなだった。

気を抜いたらあつという間に果ててしまふに違いない。そこで衛は下腹部に力を入れて射精を堪えつつ、本格的な抜き差しを開始する。

パンパンパンパン……力いっぱい腰を打ちつけるそのたびに、下腹部が少女のむっちりとした臀部を打つて濡れた肉音を響かせる。自分主導でのピストン運動は初めてのことだったが、体位のおかげもあつてスムーズに腰を振ることができた。

(うあああ……膣内の感じも、ブリーズさんとは全然違うんだなっ……!!)

昨日味わつたブリーズの膣内は奥へ奥へと吸い込まれるような感じで、粘っこい粘膜がペニスへしゃぶりつくみたいに迎え入れてくれた。一方今回はまるで肉を掻き分けてペニスを突きたてていくかのよう。何も知らない処女粘膜を自分の形に歪めてゆく——処女地を開墾していく征服感はまださらな雪原に自分だけの足跡を残す快感にも似ていた。

(あああ……ガイアさんの中すごいキツキツ……お尻もムチムチしてるし……きつ、気持ちよすぎるっ……!!)

腰を繰り返すたびにぶつかりあう柔らかくも弾力たつぷりな美尻の感触を楽しみつつ、処女膣のもたらず食いちぎらんばかりの締め付けを思う存分堪能する。

「ガイアさんのなかつ……すごかつ、気持ちいい……ですっ!!」

「そつ、そうか……よかつたつ……わつ私もおつ……なんだか、感じたことのない……変な気持ちにっ……なつてえっ……ふうんっ♥」

腰を突き出せば膣壁の襞がカリ首に絡みついて甘美な刺激を刻み、引き抜こうとすれば

膣道全体がイソギンチャクみたいに収縮して勃起にしやぶりつき牡を離そうとしない。

（やばっ本当に気持ちよすぎっ……射精しそうになっても絶対我慢、ガマンしないとっ

——!!）

ズブツ、ジュブツ、ズヌブウウツ!!

ストロークのたび交互に訪れる異なる喜びに童貞を卒業してまだ間もない少年は瞬く間に虜となって夢中で腰を振り立てた。

「ふぁうっんっ……まもるうっ……はっ、激しすぎっ……ひよろつとした身体のくせにつ……どこにそんな力っ、隠してたん……だぁあっ……♥」

ずぶつずぶつにゆぶつじゅぶつ……腰をがっちりと捕まえての抽送にガイアはチューニング中のラジオみたいに声のトーンを激しく上げ下げしつっ嬌声を垂れ流す。テーブルについた手はその表面をカリカリと引っ掻き、こみ上げる快感に耐え忍んでいた。

（よかった、ガイアさんちゃんと感じてくれてる——この分ならもっつと激しくいっても大丈夫、かもっ——）

そのことに感動とともに新たな自信を得た衛は、柔らかくほぐれてきた膣の感触からこれ以上は押さえつける必要もなからうと抜き差しを固定するため腰を掴んでいた手を上滑りさせてコスチュームの中へと滑り込ませる。

お尻にばかり目を奪われて気づかなかったがガイアはそのバストも意外なくらい立派で、巨乳とまではいれないが弾みをつけるように下乳を叩けばしっかりと掌の中でプルンと

跳ね躍った。

(すごいぷるんぷるんっ……それに、乳首もコリコリしてっ……えっエロすぎるっ!)  
充血にしこり立つ乳頭の感触に、少女の興奮を実感して鼻息を荒くしながらぐにつぐにつと力強い搾乳を繰り返す。

「ひゃっ…むっ、胸っ…勝手にさわるなあっ?!」

背後から不躰に胸を弄ばれたガイアは驚き声を荒らげるものの、こんな触り心地のいいものをすぐさま手放すなんてとんでもない。それに彼女の声色に混じる媚声からして不快に感じていないのは明らかだ。だから少年はわざと聞こえなかつたふりをして、さらなる刺激を欲しているように屹立している乳首を摘む。

きゅっ、きゅんっ!!

「ひんっっ♥ やっ、胸えっ……んああああ……♥」

勃起乳頭を押し潰された瞬間、まるで全身に電気が走つたみたいにガイアは身悶え、待望の乳悦にその頬が緩み声が蕩けた。

(すっ、すごい感じっぷり——)

興奮した衛が捕らえた乳突起をまるで乳房を持ち上げるみたいにぐいぐいとひっぱりあげてさらに激しい刺激を送り込むと、

「あひゃっ、乳首いっ、ひっ、ひっぱるにゃあっ……ひゅんっ♥」

乳腺まで差し込む喜びに、性的刺激に免疫のないガイアはかぶりを振って逃げ惑う。

しかし衛はやめない。嫌がっていないのは彼女の漏らす嬌声は何よりの証拠だ。ほおずき鬼灯の  
実から笛を作るみたいに敏感乳首をやわやわと揉み捏ねてやると、指の中にミニチュアの  
心臓があるみたいにとくんとくんと健気に脈を打って充血し、圧迫する指腹さえ押し分け  
んばかりに力強く屹立した。

「ガリアさんってとつても感じやすいんですね」

可愛い女の子にはつい意地悪をしたくなるもの。興奮した少年は昨日ブリーズにされた  
のを真似て、あげつらうような口調で意地悪く囁いてやる。

「やだっ…いつ、言うなあっ…んあっ♥」

ずんっ！

恥じらいの声も、子宮を叩くように腰を打ちつけると一気に甘い牝鳴きへと変わった。

（うわー可愛すぎっ…もつと、もつとエッチになるガリアさん見てみたい——!!）

そんな衝動に駆られた少年はポケットの中からプラスチックの小物を取り出す。それは  
朝方風間センパイから手渡された秘密兵器——小型のピンクローターだった。電源を入れ  
ると細やかな震動に指が痺れたみたいになる。抽送に気を取られるあまりガリアはまだお  
もちやに気づいていない。少年は振動する淫具を隠し持ちながら再び乳房をすくいあげ、  
ぐにゅつと乳肉の奥へと埋めるように押し込んでみる。

ぐうぐうぐう……!!

「ひゃあっ!! なっ、なんだこれっ、お前もってっ……んうあっ♥」

小刻みな震動に敏感乳首を強襲されたガイアは乳球全体をプルプルと波打たせながら素  
つ頓狂な悲鳴をあげる。少女は何をされているかもわからないままに、まるで全身がバイ  
ブ化したみたいに肢体を震わせながら声まで震わせ喘ぎ鳴く。

(すっ、すごいっ……ローター責めってこうなっちゃうのかっ!?)

胸だけでこの反応、ならばもつとも敏感な部分に当てたら——想像しただけで思わず喉  
が鳴った。はやる気持ちを抑えながら乳頭をくじいていたローターを恥丘へと向ける。掻  
き分けるまでもない柔らかな産毛の上から割れ目の端へと押し当てると、ぷにと求肥<sup>ぎゅうひ</sup>  
たいな感触の土手肉へとめり込み振動が結合する勃起にまで伝わってきた。

ヴウンッヴヴヴヴヴヴヴヴ——ツッ!!

「ひんぐうっ♥ ひやめっ、そこだめっ……だっあっあっああ……っっ♥」

まるで音楽室の張り紙みたいに口を「あ」の形に大きく開いたまま絶叫をあげたガイア  
はどうか振動から逃げようとたつぷりと肉の詰まった桃尻を突き上げるようにして腰を  
引く。しかし背後から交わっている衛からすればガイアにその巨桃を思いつきり腰へと叩  
きつけられる格好だ。そこで衛は腰を抱え込む代わりにローターをより強く恥丘に押し込  
み巨桃を引き寄せ、少女の腰が退けたところを狙って押し返すように激しく腰を繰り出し  
下腹部で美臀を打ちつけた。

パンッパンッパンッパンッ……腰を前に繰り出せばローターに陰核を苛められ、それか  
ら逃れようと腰を退けばより激しい抽送で肉槍に子宮まで貫かれる——少年の腕の中でガ



イアは引き締まった美尻を前へ後ろへ行ったり来たり。いいように翻弄される。

「やだっ、もうやだあつ……イクのっ、もういつちゃうんだからあつ……こんなのやだっ、衛とっ、まもるとイキたいよおおっ……!!」

挟み撃ちの喜悦に堪えかねたガイアが子供っぽい口調で限界を訴えてくる。

「!! ぼっ、僕もガイアさんといきたいですっ!!」

嬉しすぎるおねだりにほだされ、両手に携えた淫具をテーブルの上へと投げ捨てる。と、改めて牝腰をがちりと捕まえ一気呵成のピストン運動でラストスパートをかける。

ズッ、ズブッ、ジユブッ、ズブウウウツツ!!

「ひうんっ、くううっ……ううっ、もうっ……調子っ乗りすぎ……だっ……お前がそんなあつスケベだなんてっ……おっ、思わなかったぞまったくっ——!!」

ローター責めから解放されたガイアは激しい抜き差しに、言葉を喘ぎで途切れさせながらも、目尻に涙まで溜めて拗ねるような口調で抗議してくる。

「ごめんなさい——でっ、でもガイアさんが悪いんですよ、そんなに可愛すぎるから」

「だっ、可愛いつて言うなって言ってるだろおっ……」

「だって本当に可愛いですから仕方ないですよ」

言葉で伝えきれない気持ちをお届けたくて、少年は踵を上げてぐっつと背伸びすると——。

ちゅっ♥

肩の方から首を伸ばし唇を重ねる。



「!?」

不意に唇を奪われたセーラー戦士は面喰らったように目を見開いていたものの、こちらが差し出した舌で桜色の唇を撫でると花の蕾が咲くように遠慮がちに口元を開いて迎え入れてくれた。

「んぶあつ…んつ…ちゅうつ♥」

まるでお酒を飲んだみたいに目をとろんとさせ頬を上気させながら今度は向こうから唇を啄<sup>つば</sup>んで来る。ほのかに甘い唾液の味に頭の芯が痺れたみたいに意識が酩酊し、こみ上げらる愛しさにこちらからもまた唇を貪る。

「んっ、ちゅっ、んあつ…んむうっ……!!」

キスの経験などないのだから。ガリアのそれはブリーズと比べようもないくらいただどしく、相手と同じく経験の少ない自分だということもあつてなかなかうまくいかない。舌を絡ませようと伸ばせば向こうはフレンチキスを欲しがって唇をツンと突き出し、それならばと唇を重ねようとすれば今度は向こうが舌を差し出し味蕾に接吻を交わす。

そんなちぐはぐなやり取りを何度か繰り返した後。

「ああつ、もうっ!!」

ガリアは耐えかねたように怒気を孕んだ声をあげると、テーブルについていた手をこちらの後頭部へと回して自分の方へと押し付けた。

「はむっ♥ んっ、ちゅっ、んちゅうっつ——♥」

「あついやつ……そのつ、なんかお疲れみたいだなーなんて」

いくらこれからセックスをするとはいえ、いきなり欲情丸出しというのもあまりにカッコ悪い。咄嗟に適当なことを言った衛だった、

「あー、わかるー？ 顔に出てるのかな……最近いろいろお仕事多めなんだあ」

セーラー少女はこちらの言葉に激しく同意しながら、ラジオ体操みたいに首を時計回りにくるんと回す。

（どこの誰かは知らないけれど、普通に生活しながらセーラー戦士もやってるんだからそりゃ疲れるよなあ）

その苦勞に思いを馳せて一度は大変そうだななんて思うもの――。

（しかし待てよ？ ここはひとつ肩でも揉みましようか流的流れで行けば自然な感じでボデイタッチに持つていけるのでは――？）

思春期男子という名のフィルターで労いの気持ちをエロ方向へとシフトさせた少年は、

「大変そうですね……肩こってるなら揉みましようか？」

本当は一番揉みたいその胸元に視線を向けつつ申し出る。

「えっ、そんなの悪いよおっ……けどちよつとだけ、お願いしちやおっかな？」

一度は固辞するも、よほどお疲れだったのかアクアは遠慮がちにこちらの申し出を受け入れてくれた。

「お願いされちゃいますっ！」

衛は光の速さで彼女の背後に回り込んでその肩に手を乗せる。グッと指圧してみるとなるほど本人の言う通り、肩の筋肉がこわばっているのがわかった。

「あつ、気持ちいいっ……衛くん、肩もみ上手だねえっ」

ふうっ、とまるで温泉につかっているかのように心地よさげな溜息を漏らすセーラーアクア。対する衛は彼女の肩越しに覗く絶景に息を呑んでいた。

（うはっ、この角度から見るとおっぱいってものはや犯罪レベルだなっ……）

アクアの肩越し斜め上から見下ろしたその胸元は正面からよりもはるかに持ち前の超絶ボリュームが実感できる。襟からは深い谷間が覗いてその奥へと視線を飲み込み、しかもこちらが肩に指をめり込ませるたびにぷるっぷるんっつとできたてのプリンみたいに弾力豊かに躍るのだから堪らない。

（あああああ、触っちゃおっかな……でもいきなり揉んだら嫌われちゃうかも）

なんてよからぬことに頭を悩ませていると、

「でもわたし、本当によく肩が凝るんだあ。やっぱりこのお胸のせいなのかなあ？」

などと言いながら、自分の胸を掬い上げるようにたぶたぶと持ち上げるセーラーアクア。（うおおおおおっ……こっこれは、目の毒すぎるっ……!!）

眼前で躍る躍動感たっぷりの乳プリンに肩もみも忘れて興奮していると。

「ほら衛くんも触ってみてー。本当に重いんだから」

水使いの少女は信じられないことをのたまいながら、くいつとこちらの手を取ってきた。

赤ちゃんみたいになんか柔らかくて温かな掌。たったそれだけの動作でもセーラー服越しの双球はぶるるんっ、と弾力豊かに躍る。

(さっ、触つてもよかとですか——!?)

まさか向こうからスキンシップを要求されるとは思ってもしなかつた。しかもその口ぶりからして肩もみの延長のつもりらしい。この無邪気すぎる態度、どうやら彼女、やや天然の気があるようだ。

しかし向こうがどういうつもりだろうとおっばいはおっばい。

「そっ、それじゃ失礼してっ……」

しっとりとした掌の温もりと揺れ躍る乳房の舞いに一気にボルテージの上がつた少年は、震える手でコスチュームの上から左右の乳房をそっと包むように触ってみる。

ふにいいいい………っつ!!

(うおおおおおつめちやくちややかっ! 手がっ…手が天国にゴートウヘヴンしてるっ………!?)

掌の中でひしゃげる感触はなるほどよくマンガやなんかでマシユマロに喩えられるのが納得のふわふわとした柔らかさだった。同時に両手に感じる重みは左右それぞれ熟れ頃のグレープフルーツほどもあり、掌を下へ下へと押し下げてくる。

「ほっ、本当に重たいですね……」

むにっ、むにいいいいっ♥

指先へわずかに力を込めただけで、双球が衣装の中で躍動する。その柔らかさをもっと味わいたくて、あくまで重量を計る体を装って特大の乳饅頭にやわやわと指をめり込ませていると。

「ひゃっ……衛くんの手えっ、えっちな触り方だーっ！」

めり込む指の感触に、アクアがピクンと身じろぎ、非難の声とともにこちらに顔を上げた。

「ごっ、ごめんなさい!!」

慌てて胸から手を離すが、目の前のアクアは顔をこちらに向けたまま。「むっっ」とばかりのふくれっ面だ。

「んもおっ、衛くんってばわるい子っ！」

(やばっ怒られるっ——)

こういう普段おっとりした性格の人ほど怒らせると怖いもの。戦々恐々としてみると、「……ってあれ? でもこれからえっちなことするんだからこれでいいのかな?」

一旦は怒り顔を見せたアクアだったがその後はたと考え込み、口元に人差し指を当てながら首をかしげて自問自答。

「ごめんごめん衛くん。わたしのパワーアップのために頑張ろうとしてくれたんだよね」  
最終的にはなぜか詫びられてしまった。

「へ? いや、あの……」

最初のリアクションこそ模範解答だったと思うのだが——さすがは正義のセーラー戦士、基本性善説で生きているらしい。勝手に冤罪扱いを受けた真犯人のような気持ちで生返事をする、と、

「ほらどうぞ、わたしのおっぱいでよかつたらもつと好きにしていよいよ？」

笑顔に戻って言いながら、一度は払い除けた手を掴むと自ら裾を持ち上げ隙間を作り、その中へと引き寄せてきた。

「えっ？ あっ、はっはい——」

面喰らいながらも誘われるまま制服の裾から手を潜り込ませ、脇腹を撫でるようにして遡上する。その掌同様、アクアの肌は生まれたての赤ちゃんみたいにスベスベだ。

「んっ…ふぁっ…衛くんの手えっ……すぐく、熱い…ねえっ」

羽で撫でるような愛撫に少女が鼻から艶かしい吐息を漏らす。生まれたてみたいなのこの素肌はその感触同様、非常に敏感らしい。

（すごい柔らかいカラダっ……こりやおっぱいもさぞかし——!!）

五本の指を蠢かせいいだけお腹をくすぐった後で、いよいよその上方で実る乳果実へと狙いを定める。コスチュームの中で熟れきった果実みたいに実った二つの膨らみを下から掬い上げるような形で手中に収めてゆく。

むんにゆいゆい…!!

（うわっ、大きいっ!!）

手の中に感じる乳房の重みは先ほどコスチュームの上から触った時をさらに上回るボリユーム感、ずっしりとした乳肉はその一方だけでも衛の両手に収まらないほどの大きさがあつた。それを片手で揉みしだいたものだから当然開いた指の隙間から柔肉が漏れ溢れ、指と指の間にまでその温もりが染み入ってきた。指に力を込めてむにっ、むにっとならぬ乳房を揉みしだいてゆくと、

「やっ…あつ…：…なんか、ヘンだよおっ…：…衛くんの手でっ触られてるとおっ…：…おっぱいっ中の方からムズムズしてきちゃうっ…：…!!」

アクアは甘い声をあげながらくすぐったそうに身を振らせる。その身じろぎだけで掌の中の乳球はぼよぼよと跳ね躍り、自ら指に柔肉を沈めてきた。

(これ、感じてくれてるんだよ、な…：…おっぱい大きいと感度悪いって言うけど嘘だな)

その敏感な反応に強い嗜虐心が燃え上がり、もつと喘がせてやりたい衝動に駆られて。衛は指先を乳峰の山頂に息づく桜色の敏感突起へと差し向ける。

くりっ…：…くりくり…：…

「ひゃっ、あつ…：…だつ、だめえっ…：…」

人差し指と親指とで乳頭を摘み軽く抓るようにして刺激すると、身体がヒクヒクと痙攣するのがわかる。紙縫りを作るように摘んだ乳首をくりくりと捏ねて充血を誘い、ぷつくりとしこり立ったところをピンボールのフリッパーみたいにな差し指でピンッピンと弾く。指先が勃起乳首にヒットするたびにアクアはぴくんっとな愛らしく尻を跳ねさせ「ん

っ」と切ない喘ぎが漏れた。

「っあっ…まつ衛くんっ…上手っ…んんっ」

乳悦に感じ入る水の少女は頬を弛緩させうっとりとした瞳で何も無い天井に視線を泳がせている。揉みしだいているうちにただでさえ柔らかな乳肉は蕩けるようにほぐれ、滲み出す汗とあいまってまるでつきたての餅を捏ねくつているかのよう。乳腺まで刺激するように指を乳根深くまでめり込ませると乳奥から熱気が滲み出して掌がヤケドしてしまいそうなほどだ。乳粘膜の充血は勃起乳首にとどまらず、乳輪までもが火をかけたパンケーキのようにぷくつと膨れて指先の感触だけでその大きさがわかるほどだった。

(なにこれやばいっ…アクアさんのおっぱいエロすぎるっ…!!)

背後から執拗な搾乳を繰り返しセーラー戦士を喘がせながらも、優しいお姉さん然としたアクアの見せるゾツとするほど艶っぽい表情や仕草を前にして衛もまた股間の疼きに苛まれ空腰を使ってしまう。

「んっ…衛くん、辛い…それ？」

コンッコンッ、とパイプ椅子の背中に押しつけた股間からアクアがこちらの狂おしい憤りに気づいて声をかけてきた。

「えっ、あのっ……はい」

まるで自慰を見咎められたような気まずさに恥じ入りながら答えるも、疼き腰はお構いなしにひとりでパイプ椅子へぐりぐりと股間を擦り続けてしまう。



自分もまた乳悦にしまりのないト口顔でこちらを見上げたセーラー戦士は、

「ねえ、わたしだけ気持ちよくなつてたら悪いし……今度はわたしが衛くんのこと気持ちよくしてあげるね?」

少年の手の甲に掌を重ね搾乳の一時中断を促すと、アクアは自らぐいつとセーラー服をたくし上げ胸元を露出させる。

ふるるんつつ♥

少しコスのサイズが小さめ——いや、彼女の胸が大きすぎるからだろう。勃起乳首を引っかけながら零れだしたミルクタンクは窮屈な締め付けからの解放を喜び合うように左右でゆさつゆさつと元気に跳ね回る。

(すすすごつ……あれでもまだ着やせしてたんだつ……!!)

たわわという言葉ではとても足りない乳風船。その圧倒的なポリウムに比べると乳輪はさほど大きくもなく、乳頭もまた可愛らしい小豆大だ。そしてそのどちらもが春先の校庭に咲き誇る桜の花弁にも似た綺麗なピンク色をしていた。

「もう、そんなにじつと見つめられたら恥ずかしいよおっ——さ、おっぱい見たんだから衛くんもわたしにおちんちん、見せて?」

乳視姦に恥じらいながらも、アクアははしたない交換条件を提示してくる。

「はっ、はいっ——」

促されるままズボンを脱ぎ、トランクスを脱ぎ捨てて少女の前で仁王立ちになる。差し

出した股間は既に完全な臨戦態勢、亀頭はひとりでに包皮を剥き上げ露出して、鈴口に朝露のような先走りの雫を王冠のように湛えていた。

「うわあ……これが男の子のおちんちん、なんだあつ……すごいっ、なんだか強そうっ」  
天を仰いでそそりたつ陽根を前に驚きの声をあげるアクア。よほど珍しいのか床に傳かたずいた少女はこちらの股間と目線を合わせるとキョロキョロと首を伸ばし様々な角度から剛直を観察してくる。

「あ、あの……あんまり見てられてもっ……」

次第に沸き上がる恥ずかしさとじれったさに耐えかねた衛が声をかけると、

「あつ、ごめんごめんっ……それじゃ、いくよおっ——」  
むんにゆいゆいっ。

セーラー戦士は跪ひざまずいたままこちらの股間へと身体を傾け、手にした乳球で竿を左右から挟み込んできた。

「あつ、アクアさつ……んっ……!?!」

突然のパイズリに驚き、その包み込むような温かさに腰が勝手にビクンと跳ねた。

「こういう風にするの、男の子好きなんでしょ？ 知ってるんだよー、この前クラスの男の子から没収したえつちな漫画に描いてあったんだから」

えへん、とばかりに知識の出所を明かしながら、ゆっくりと乳肉を上下させて陰茎を扱きだす。

(クラスの男子ってっ…まさかアクアさんもウチの生徒——)

知らず知らずのうちに思いつきり自分の正体に対するヒントを出してしまうあたり、やはり天然だ。だがそんな考察も柔乳奉仕のもたらす悦楽の前にはあつという間にアンドロメダ星雲の彼方へ光の速さで飛び去ってしまう。

むにいつ、ふにいいいつ……♥

(パっ、パイズリされてるっ……セーラー戦士の方からこんなエッチなことしてくれるとかっ——!!)

見るからにおっとりとしたアクアの大胆な行動。人肌で温めたマシユマロのように柔らかくも温もりいっぱい柔乳に左右から飲み込むように挟まれて。ただでさえ勃起していた陰茎へさらに多量の血液が送り込まれて破裂寸前までピンピンに張り詰める。

「わあっ、おちんちんまだおおきくなるんだあっ♥ わたしのおっぱい、気に入ってくれたの？」

こちらの浅ましい反応にしかしアクアは嬉しそうに屈託のない笑顔を滲ませ、挟み込んだ自らの胸を上下に揺さぶり抜き始めた。

「ふっ、あああっ……!!」

(アクアさんのおっぱいはかぼかでふにふにっ……ちっ、チンコ蕩けそうっ!!)

掌よりもずっと敏感なペニスで感じる柔乳はどこまでも柔らかく温かい。ふわふわと柔らかな乳肉の感触に自ら吐き出した先走り汁の滑りがローション代わりとなつて、艶やか

な美肌の感触が竿を優しく包み込む。これまでブリーズ、ガイアと立て続けに儀式をしてきたが、胸による奉仕は口でされるのやセックスをするのとはまた違う未知の体験だった。「どう？ わたしうまくできてるかな……気持ち、いい？」

ぬちつぬちつと卑猥な音を奏で乳奉仕を施しながら、こちらを見上げる水の戦士。

「いいっ…すごくいいです…というかよすぎて、もう出ちやうかも…?!」

手コキやフェラチオ、セックスともまた異なる、腰骨を芯までとろとろにされるような甘く優しい快感に早くも音を上げると、

「ダメだよお、まだだしちゃ…ふふっ、おちんちんびくつびくつて跳ねてる、可愛いっ♡」

本気でそう思っているのだろう。自ら胸に抱きしめた怒張を目に、愛しそうに呟きながら、アクアは谷間から突き上げる亀頭の先端にくしゅくしゅと鼻先を擦り合わせたり何度も何度もキスしたり。その姿はあたかも子犬と戯れているかのようだ。

(アクアさんが俺のチンコに口つけてっ…!!)

愛情たっぷり爆乳奉仕にポルテージは一気に上がり、鋼のような強直がズンズンと天を衝くように暴れまわる。

「すごい、おちんちんすっごい暴れん坊になっちゃったっ…おっぱいでヌルヌルってするのが気持ちいいの？ それじゃあこんなのはどう？」

っう——…っ。

アクアは花びらのように形のよい口元をツンと尖らせると、シロップのように透明な唾液を垂らして自らの胸元に捕らえた陰茎へトロトロと注ぎだす。

「うあっ、アクアさんっ……!!」

ねっとりとした体液のヌメリと生々しい温かさに腰を躍らせ声を裏返す。

「なあに？ あっ、やっぱりよだれじゃ汚かったかな？」

こちらの反応の意味を勘違いして、水の戦士はしまったという顔。

「いやそんなことっ……アクアさんのだったら大歓迎ですけど……」

「ほんどっ？ よかった……それじゃあいっぱい気持ちよくなってるねー？」

ぬりゅっ、にゆるっ、ぬりゅんっ……唾液を塗り込められた乳肌はまるで粘膜質に生まれ変わったかのようににやりしくてかり、肌に纏った粘液で張り詰めた勃起をぬちゅぬちゅと舐めるように捏ね回す。乳房がもたらす快感に魅せられ、こちらもまた応戦とばかりに腰を使い、谷間にずぶずぶと剛直を突き立ててゆく。

ズブッ、ズブッ、ズブウウウウ——……!!

(すごっ、俺っ……俺今アクアさんのおっぱい犯してるっ……!!)

まるで胸に臀部がついているみたいに豊満な肉果実、その谷間への抽送はまるで乳房とセックスしているかのようだ。しかも目と鼻の先でアクアに見守られながら腰を振っているとと思うと嗜虐と被虐が入り混じって頭がおかしくなるくらい興奮してしまう。

「ひゃっ、すごい衛く……んっ……おちんちんっ火熾しちやいそおっ……!!」





「いいな夏希ちゃんっ…次っ、次はわたしだよ衛くんっ…衛くんのおちんちん予約していいよねっ!!」

見上げればアクアが瞳を潤ませ切なそうな顔でこちらを覗き込んでいた。下から望むアングルのおかげでただでさえ豊満な彼女のバストがより巨大に感じられる。

「はっ、はい…次はアクアさんっ…水沢先輩でっ…!!」

ミルクタンク、という言葉がぴたりきそうな爆乳に生唾を飲みながら首を縦に振ると、  
「やったあっ♥ いっっぱい気持ちよくなるーねっ衛くんっ♥」

生徒会長は喜びのあまりそのままこちらの顔に胸元を押し付け抱きしめてくる。

「はぶうっ!？」

むんにゆうっっ♥

左右から挟み込む乳肉の温もりと甘い香りに脳髓が蕩けそうだ。

「こらっ葵っ、ずるいぞ…今は…今だけは私の衛なんだからっ…!!」

そんなやり取りにヤキモチを妬いたガイアがおしおきとばかりに膣をキツく締め上げる。

「んくあっ…ご、ごめんなさい先輩っ…お詫びに、いっっぱい気持ちよくしてあげます!」

少年は両手を牝腰に回すと、脂の乗ったムチムチの美臀を驚掴み。スポーツ女子ならではの瑞々しい弾力を楽しみながら激しいピストンでガイアを責めたてる。

「ふうんっ♥ すごっ、こんなっあっ、あああっんっ♥」

スポーツで鍛えた膣圧にそうそう長く抗えるはずもなく、百メートル全力疾走のような



荒々しい腰使いでの抽送で絶頂まで駆け抜けた少年はガイアの胎内で本日二度目の射精へ至る。

びゅるくっ、びゅっびゅるくっ、びゅっびゅっびゅううううつつ！！

「まっ、まもるうううつつ……♡」

受精絶頂に打ち震えながらガイアが何度もキスをしてくる。腰が抜けてしまっているらしい彼女のパツンパツンの桃尻を優しく抱えてペニスを抜くと、すぐさま熱い滑りが勃起を啜えてきた。

「ふあっ?! ちよっ、水沢先輩っ?!」

驚きと快感に声を裏返らせながら下半身へと視線を向けると、ガイアの陰に隠れていたアクアがこちらの股間に顔を埋めていた。

「入れる前におつきくしてあげた方がいいのかなって——でも全然平気みたい。ところでヨーグルトみたいに少し甘酸っぱいのってこれ、夏希ちゃんの味なのかな〜？」

「そっ、そんなの味わわなくていいからっ!!」

自らの愛液をティスティングされて、恥ずかしさに腰砕けのガイアがエアマットをぼふぼふ叩く。

「ふふっ、わたしもこの間衛くんとしたの、忘れられなかったから嬉しい——あのときは衛くんがわたしのこと気持ちよくしてくれただから今日はわたしが衛くんのこと、うーんと気持ちよくしてあげるね？」

はしたない宣言とともに生徒会長はそのまま腰の上に跨がり股間を剥き出しにする。晒された下腹部は湯上りのため水気を吸って恥丘に海苔のようにべったりと貼りついた陰毛が卑猥だ。先ほど行われた腕を跨いで腰振りのおかげで割れ目の辺りは毛がかき分けられており、摩擦で桜色に色づいた姫貝がはつきりと見て取れた。

「それじゃいくね——」

セーラーアクアはこちらの胸板に手を置くと、和式便器に跨がるようなはしたない格好でゆっくりと腰を落とす。

ぐちゅっ…ずぶずぶううう…!!

割れ目がぱっくりと口を開いて自分のペニスを丸呑みしてゆく様を目撃しながらの結合は剛直へとしゃぶりつく腔粘膜の生々しさをより強く実感させてくれる。

「っあああっ……すご、いつ、アクアさんのなかつ……すごく熱くなってるっ……!!」

「衛くんのおちんちんもどんだん硬くおつきくなってるみたいっ……♥」

よほどよかったのかふーふーと荒い息をつきつつこちらに体重を預けてくるアクア。たつぷりと脂の乗った美臀や太腿のむっちりとした感触が気持ちいい。

「やあんっ、気持ちよすぎてお腰ぬけちゃった……ごめん……ね……重くない、かな」

「ぜっ、全然っ…生徒会長の身体、やわらかくてすごく気持ちいいから……」

「えー、それっておデブってことお？」

「いや、そういう意味ではっ……」

「もうっ、おしおき♥」

キュッ、と膣を締め上げてきた。そしてそのままの字を描くみたいに中空で腰をぐるぐるぐりと旋回させペニスを前後左右へとひっぱりまわす。

「うはっ!? かいちよっ…そっ、そんなされたらもうっ——!!」

こみ上げる射精の予感に抗えず、疼きに耐え兼ねこちらからも腰を突き上げる。

「あんっ、もう三回も出してるのに元気っ…おちんちん、捕まえてらんないよおっ♥」

じゅぷっ、ずぶうっ、ずぶずぶじゅぷじゅぷ…元々締め付けの緩やかなアクアの肉壺は衛の反撃にあっという間に屈して締め付けを解き、後はただ蕩けたみたいに竿に纏わりついて膣壁を小刻みに痙攣させ子種をねだる。

「キスっ…衛くんっ、ちゅーしよお」

上半身を傾けてきたアクアのおねだりにこちらも必死に頭を持ち上げて唇を重ねる。胸板でふんにゆりと潰れた乳房の柔らかさと温かさはなんともいえず心地よく、しかし同時に乳首同士が擦れ合う刺激は火花のように鮮烈な乳悦を瞬かせてお互いを喘がせた。

「あああっ…もう、射精ますっ、イク——!!」

「うんっ、いこっ…一緒にイこっ♥んっ、んっ、んんん——ふあああっ♥」

びゅくっ、びゆるびゅくびゅびゅびゅ——っ!!

唾液の甘みと爆乳の包容力に溺れながら、痙攣を繰り返す膣壺に心地よくザーメンを搾り取られる。

「ふああっ熱ういっ……衛くんのがお腹の中で泳いでるみたいっ——♥」

持ち前の剛毛をこちらの陰毛と絡ませるみたいいに腰をズリズリと細かく前後させながら、アクアはダメ押し of 搾精で尿道の一滴までをも吸い尽くす。

(まっ、またすぐ射精しちゃったっ……早漏だっと思われてないかな、俺っ……?)

自慰はおろかこれまでのセックスと比べたってあまりに短い射精までの間隔に、思わずそんなことを危惧してしまう。しかしそれも全ては彼女たちセーラー戦士があまりに魅力的すぎるせいだ。実際だった今吐き出したスペルマは三度目にもかかわらず量も濃さも最初の物と遜色なかったし、アクアが離れてからも絶えず誰かに愛撫を受け続ける陰囊は次の射精をまだかまだかと待ち望むように疼き続けていた。

「はいお次は真打登場っ☆ チーム一の愛され女子のブリーズちゃんがお相手だよ♪」  
まだアクアの胎内への放精を終えないうちにブリーズはこちらに尻を向ける格好で胸板を跨ぐと、

「ほらほら衛ちゃあんっ、見てみてっ♥ アタシのココオ、こーんなにヌルヌルになっちゃうってるんだよお♥」

くばあっ♥

クロッチをずらすと同時に陰裂を割り広げてサーモンピンクの姫口を露出、クチクチとイヤらしい粘音を奏でながら開閉を繰り返す膣前庭を見せつけてくる。

「ふああ……すごかったあっ、それじゃブリーズちゃんと交代ね？」

「まっかしといてっ♪ オチンポ萎える暇なんて一秒だつてあげないんだからっ♥」

にゅぶぽおおっ——ずぶっ…ずぶずぶずぶううう…ズンッ!!

まるでリレーのバトンタッチみたいにあくアが退いたのと入れ違いにブリーズは腰を移動させ、尻を向けたままペニスを捕らえみんなとは逆向きに腰を沈めてきた。

「はあんっ♥ きたきたっ…：…やっぱ衛ちゃんのっ硬さがサイコオッ♥ ほおらっ、もつと腰ガンガンぶつけていいから奥までっ、おま○こ奥まで突いてえっ♥」

ずぶっ、ずんっ、ずぬぶっ、ずぶうううっ!!

こちらの膝に手を置いて、ブリーズはのっけから苛烈に腰を振りたくる。前かがみになって腰を使っているものだから、こちらの視界に映るのはまん丸の白桃尻ばかり。そのせいでまるで尻だけがペニスを啜えたり吐き出したりして扱きたてているかのようだ。両乳首を舐めくすぐるあくアとガイアのトロ顔もあいまって、世にもいやらしい光景が視界いっぱい展開しており眩暈を起こしそうだ。

「ブリーズさっ…風間センパイっ…：…こっ、こっちからもっいきますよっ!!」

ほんの一週間前とはいえ、もう童貞だったあの頃とは違うのだ。弄ばれた童貞喪失のりベンジとばかり、少年も負けじと腰を突き上げ果敢に膣奥をほじくり返す。

「ふひいんっ!? すごっ、衛ちゃんぜったい最初の時よりうまくなってるっ…：女の子の気持ちいいとこっちゃんとわかって責めてきてるうっ…：アタシもオっ本気になっちゃうゾオっ♥」

レゲエダンスのような激しい腰使いで唾えた剛直を扱きたてつつ振り回す。

「ふうっ、んっ…早くイかせてあげるねっ、尊ちゃん早くしたそうな顔オ、してるしっ」  
淫靡な蕩け顔のプリーズがイグニスを見ながらにつこり笑ってそう告げる。

「わっ、私はそんな顔してませんっ…こっ、こんなこの馬の骨ともわからない男子なんてっ…」

指名されたお嬢様は必死になって否定する。

「そうだよなあ火浦、皆の前でまた漏らしちゃまずいもんなあ？」

この期に及んでの下男扱いにカチンと来た衛がわざと大声でそう言っでやると、

「はっ!? もっ、漏らしてないしっ…アンタは知らないでしょうけどね、あれは俗に潮吹きという生理現象で排出されるのも尿とは違うんだからっ！」

必死になって反論してくるお嬢様。失禁はダメだが潮吹きはOKという彼女の判断基準はよくわからないし、そもそも潮吹きの本に本当のお漏らしもしていたと思うのだが――。

「へー勉強してきたんだ？ まあ最初っから知ってたけどね俺」

涼しい顔でそういつてやるとお嬢様は一瞬きよんとした顔を見せ、その後みるみる顔を紅潮させ黒髪を逆立たせた。

「じっ、じゃあアンタ、知ってて私のことをからかったってワケ…こっ、このおっ!!」  
激昂したお嬢様はベッドの上で立ち上がると、こちらの顔を跨ぐようにして見下ろして

「この火浦尊を辱めた無礼の数々っ！ その身体で代償を払わせてあげるわっ!!」

ズンッ♥

天罰とばかりにヒトの顔を椅子代わりにして腰かけてきた。

「きゃっ、尊ちゃんダイタンっ……♥」

顔面騎乗を目の当たりにして、陰囊按摩を続けていたアクアが口元に手をあて黄色い声をあげる。

「苦しい？ 息がしたかったらしっかりと私に奉仕なさい——そう、犬みたいだねっ!」

不遜な物言いとともに、イグニスは馬の鞍に乗るみたいに内股でこちらのこめかみを挟み込んで顔と股間とをより密着させ、グイッグイッと腰を前後に揺り動かして顔面ウォッシュの刑に処す。とはいえこんなの相手が美少女となればご褒美以外の何物でもない。

「んっぐっ、ぐぐ……むうっ……!?!」

（うわっ甘酸っぱいっ……女の子のおま○こ……おっ、美味しすぎっ……♥）

プニプニの恥丘に鼻腔を、陰唇に口元を完全に抑え込まれた少年は、酸味強めのかんきつ類に蜂蜜を混ぜて煮込んだような愛液の味に少年は喉を鳴らし、嫌がるどころか腔口へと舌を捻じ込ませて女蜜を味わい尽くす。

「あつ、あんつ、アタシもおイキそオつ……衛ちゃん、こつちに集中してえっ!」

じゅぷっじゅぷっずぷっずぷっずぷううう——っつ!!

青い果実へのクンニリングスに没頭する少年を奪い返そうと言うように、ブリーズが体

勢を変え一気に抜き差しの速度を速めてきた。深く突き込んだ瞬間膣圧でペニスを喰い締め、そのままズリと引き抜いて根元から先端まで搾り上げるみたいにして射精を誘う。

「んぶあああつ、そんなつ、そんな風にされたらあああああつつ!!」

さすがは百戦錬磨のスーパーピッチ、搾精の術を知り尽くした腰使いに一気に熱いほどばしりがとば口までこみ上げる。激しい抽送に晒され全身を這い舐める舌にねつとりと蕩かされ、その上お嬢様の顔面椅子にまでされて。五感フル稼働で女の子を感じながらのセックスに少年はまたもすぐさま音を上げる。

「あああああついつ、イクつイキますつつ——ううつつ!!」

びゅくりゅつ!! びゅつ、びゅるつ、びゅくびゅくびゅびゅううつつ!!

本日四回目の射精だが、気管に染み付いた少女の発情臭に腰の疼きは止まらない。

「さあ、次はこの私なんだから——覚悟なさいよ♥」

ペニスを抜き去ったブリーズと入れ違いに、顔の上から退いたイグニスはその小さなヒップを躍らせながら少女たちの淫水にふやけそうな勃起を捉えて唾液に塗れた秘唇へと誘う。燃え盛る姫割れに触れたそばから勃起は形状記憶合金のように鋭さを取り戻して焔の少女を刺し貫いた。

射精しても射精しても、昂りが収まらない。まだまだしたい、もっともって彼女たちを悦ばせ喘がせ、愛したくって仕方がない。

「かつ、返り討ちにしてやるよっ……」





この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なり、美少女の方向性に入っていない

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!